別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　吉村貴之

論文題目：現代アルメニア民族の成立―第一共和国期とソヴィエト・アルメニア 1920 年代を中心に―

本論文は、オスマン帝国とロシア帝国それぞれの臣民として生きてきたアルメニア人の社会が、第一次世界大戦からソヴィエト・アルメニア成立期にかけてその社会が再編される中で新たなアルメニア民族のアイデンティティを獲得していく過程を描いたものである。特に、アルメニア知識人の描く「アルメニアの領域」や「アルメニア人」という概念が指し示す範囲の伸縮、さらにはそれを表明する際の論理やレトリックを通して、民族運動のさまざまな主体間の関係を検討したものである。

本論文の構成は次の通りである。序章、第一章：19 世紀から第一次大戦まで、第二章：第一共和国とオスマン帝国のアルメニア人エリート、第三章：アルメニア民族政党とソヴィエト・アルメニア、第四章：ザカフカース社会主義連邦ソヴィエト共和国とアルメニア共産党、終章：結論、で巻末に参考文献リストと地図が付されている。

まず序章では、問題設定と分析視角が簡潔に述べられている。ここでは特に「ディアスポラ」の重要性を指摘している点がユニークである。第一章では、19 世紀ロシア、オスマン両帝国の臣民として生きてきたアルメニア人社会における近代民族主義運動の発生とアルメニア人社会を解体させた２つの要因、つまりアルメニア人虐殺とロシア革命について考察している。アルメニア人虐殺については、アルメニア側の研究、見解だけでなく、トルコ側の見解も紹介しており、いまだに評価の分かれているこの問題をできるだけ客観的に見ようとする努力が示されている。また、本章ではアルメニア人思想家ミカエル・ナルバンディアンのインド「ディアスポラ」への極めて興味深い旅が紹介されている。第二章では、ロシア帝国下のアルメニア人社会がロシア革命後の混乱の中でどのような経緯を経て独立したのかについて論述した上で、アルメニア第一共和国がどのような過程を経て、パリ講和会議で連合国を前にして新たな領土構想を披露したかについて考察している。ここでは、オスマン・アルメニア人エリートと東アルメニアの指導者との見解の相違がわかりやすく描かれている。第三章では、第一共和国に引き続いて成立したソヴィエト・アルメニア初期におけるソヴィエト政権とアルメニア民族主義政党との関係について述べている。アルメニア民族主義政党に関しては、ダシュナク党だけではなく、これまでほとんど注目されてこなかった民主自由党を考察の対象としている点が新しいところである。共産党、ダシュナク党、民主自由党の 3 者の思惑、連携の交差の上に、ソヴィエト・アルメニアが次第に「アルメニア人の

故郷」となっていくプロセスが活写されている。第四章では、ソヴィエト政権のもとでの領域確定問題、ソヴィエト政権の民族政策が叙述され、最後にダシュナク党の「自主解散」について書いている。ここで、注目すべきことは、すでに 1920 年代初頭にナゴルノ・カラバフの帰属をめぐって共産党内で激しい議論が行われていたことを明らかにした点である。アルメニア人虐殺とカラバフ問題が、アルメニア人アイデンティティを語る上で重要な要素となっていくことを明らかにしている。終章では、1930 年代以後のアルメニア民族の形成過程を叙述している。特に、ナゴルノ・カラバフ問題の歴史的経緯について詳細に叙述した上で、この問題がアルメニア人のアイデンティティ形成に大きく関わったことを明らかにしている。

本論文の意義を挙げるとすれば、第一に、わが国においてアルメニア語文献を本格的に利用した始めての学術的業績であることである。この業績によってわが国におけるアルメニア研究は新しい段階に入ったと言っても過言ではない。先駆的業績と言えるだろう。内容的にも、オスマン帝国下の西アルメニアとロシア帝国下の東アルメニアの相違について明らかにした点、アルメニア民族主義の思想的系譜を巧みに描き出した点、アルメニア人虐殺に関して、アルメニア側に偏ることなく客観的な記述を試みている点などが高く評価できる。もちろん審査委員から若干の不十分な点が指摘されたことも事実である。それは宗教と民族との関係に触れていない点、ダシュナク党の自主解散の部分が物足りない点、ごく一部だが、転写に問題がある点、などである。しかし、これらは多くが論文の欠陥の指摘というよりは、今後研究を深めていく際の課題として指摘されたもので、本論文の価値を低めるものではない。審査委員会の評価は、先駆的かつ優秀な論文という結論で全員が一致した。総じて本論文は、アルメニア研究の分野で、卓越した貢献をした業績と認められる。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。